

安来市埋蔵文化財調査報告書 第29集

清瀬地区発掘調査報告書

—笠松遺跡—
—清瀬塩田遺跡—

1999年

安来市教育委員会

序

“安来節のまち” “ハガネのまち”などと形容される本市ですが、出雲国の表玄関として豊富な文化財に恵まれ “文化財のまち”としても広く知られています。特に埋蔵文化財が豊富であり、現在、市内には国指定史跡4件、県指定史跡4件をはじめ600件近い遺跡が確認されています。これらの遺跡は、地域の環境に適した生き方を学び、これからの方針性を模索する材料として役立つものです。

本報告書は笠松遺跡・清瀬塙田遺跡の調査成果をとりまとめたものです。これらの遺跡が立地する清瀬地区は市内最大の前方後円墳を含む清瀬古墳群の存在する重要な地区であるにもかかわらず調査の機会に恵まれませんでした。調査の結果、弥生時代の集落跡や古墳時代の墳墓が発見され、安来平野の古代史の一端が明らかになってまいりました。本報告書が地域史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたって、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成11年3月

安来市教育委員会

教育長 市川博史

目 次

序 例 言 目 次

第1章 位置と歴史的環境	1
第2章 笠 松 遺 跡	2
第1節 調査に至る経緯と調査の経過	2
第2節 検出した遺構と遺物	3
第3節 小 結	10
第3章 清 澄 塩 田 遺 跡	11
第1節 調査に至る経緯と調査の経過	11
第2節 検出した遺構と遺物	11
第3節 小 結	15
ま と め	17

例 言

- 1 本書は安来市経済部が計画する清井地区ふるさと農道新設工事に伴い、平成7～8年度に安来市教育委員会が実施した笠松遺跡の試掘調査・本調査と、不時発見により平成10年度に安来市教育委員会が実施した清澄塩田遺跡緊急発掘調査の報告書である。
- 2 今回報告する遺跡の地籍は笠松遺跡（島根県安来市清井町字笠松・清澄町字高尾地内）、清澄塩田遺跡（島根県安来市清澄町字塩田地内）である。
- 3 調査組織は下記のとおりである。（肩書きは当時のもの・順不同・敬称略）
調査主体：安来市教育委員会
調査指導：田中義昭（島根大学法文学部教授）、東森市良（安来市文化財保護委員）
事務局：市川博史（安来市教育長）、川井章弘→長瀬博美→成相二郎（文化振興課長）
三宅博士→永見 英→廣江奈智雄（文化係長）、水口晶郎、大塚 充、金山尚志
調査員：金山尚志、水口晶郎、大塚 充（以上、文化振興課主事）
- 4 調査に際しては鹿納保一氏（土地占有者）、島根県埋蔵文化財調査センター・米子市教育委員会・米子市埋蔵文化財調査室をはじめ関係諸機関に多大な協力をいただいた。
- 5 本調査に伴う遺物・実測図・写真は安来市教育委員会で保管している。
- 6 本書の挿図の方位は、調査時の磁北であり、真北に対し約7°西偏、平面直角座標（Ⅲ系）の方眼北に対し約8°西偏する。
- 7 本書の編集・執筆は金山が行った。

第1章 位置と歴史的環境

安来市は山陰地方の中央、島根県の東端に位置する。日本有数の汽水湖として知られる中海の南岸に広がる安来平野は、島根県下において、簸川平野に次ぐ穀倉地帯である（第1図）。平野を取り囲む丘陵は中国山地の支脈の末端で、流紋岩類・凝灰岩類等の火山性の山地でかなり風化侵蝕を受けており、標高30~60mの低丘陵が多い。清瀬地区は伯太川の中流域にある。遺跡は標高100mの清瀬山丘陵の南裾に位置し、細長い谷に立地するため視界は狭い。

黒井田町小汐手遺跡出土削器から、安来市の歴史は3~1.5万年前まで遡る。その後、弥生時代中期に至るまで継続して生活していたことが、出土する遺物から窺えるが、遺構を伴うものは極めて少ない。弥生時代後期になると仲仙寺墳墓群に代表される四隅突出型墳丘墓などの首長墓や柳・竹ヶ崎遺跡など大集落が営まれる。

古墳時代に入ると飯梨川を挟んで様相が異なり西側の荒島地区では“大型方墳→前方後方墳→石棺式石室”という出雲地域東部の首長墓の代表的変遷がみられる。これに対し、清瀬地区周辺は県内で最も前方後円墳が密集する地域となり対象的である（第24図）。中でも清瀬2号墳は全長57mの市内最大の前方後円墳である（第2図）。古墳時代後期には、県下一の群集墳である矢田古墳群をはじめ丘陵裾部に多数の横穴墓が造られる。

奈良時代には橋縫郷に属し、山陰道が出雲国に入り、最初に広大な平野に出る交通の要衝の地であったと考えられる。



第2図 清瀬・清井地区遺跡分布 (1:20,000)

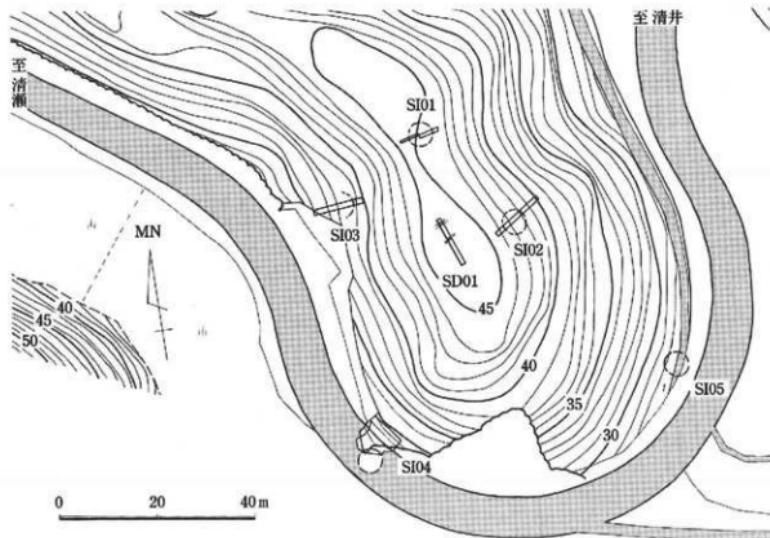


第1図 周辺の遺跡分布図 (1:100,000)

第2章 笠松遺跡

第1節 調査に至る経緯と調査の経過

笠松遺跡は、清井ふるさと農道新設工事に伴う調査である。清井ふるさと農道は安来市清瀬町に所在する高尾クリーンセンターと県道布部安来線雲樹寺前を結ぶ道路である。平成7年2月14日、安来市経済部から計画地（安来市清井町字笠松・清瀬町字高尾・金堀）の分布調査の依頼を受けた。3月17日、丘陵を削ることになる金堀地区と笠松地区の分布調査を実施した。現地は枯松が散在する山林で、笠松地区で須恵器片（SI03付近）を採取した。4月19日、試掘調査の必要がある旨を回答した。6月1日、試掘調査の依頼があった。試掘調査は6月6日～14日に金堀地区に4箇所、笠松地区に4箇所の試掘坑を設定し調査を行った結果、金堀地区では遺構・遺物が検出されなかったが、笠松地区においては住居跡3棟（SI01～03）・溝状遺構（SD01）を検出した。また、対象地以外にも住居跡（SI04・SI05）が露出していることが確認された（第3図）。笠松地区においては設定したトレンチすべてから遺構が確認された。また、計画地には明瞭な平坦面や窪みがこのほかにも多数認められ、保存状態が良好な遺跡が多数埋蔵されていることが予想された。7月18日、安来市教育委員会は調査結果から笠松地区について、計画ルート変更のお願いをした。安来市経済部はこれを受けて丘陵を迂回する新ルートを計画し、試掘調査で確認した遺跡は保存されることとなった。しかし、丘



第3図 遺構分布図 (1:1,000)

陵壠部分に位置する住居跡（SI04・SI05）は回避が困難であったため、平成8年6月10日にこの部分について本調査を依頼された。9月10日～10月30日、清瀬町側をI区、清井町側をII区とし、調査を実施した。10月29日、島根大学田中義昭教授から調査指導を受けた。遺跡の取り扱いについて、10月31日に安来市文化財文化財保護委員の会に諮詢し、11月22日に島根県教育委員会に協議した結果、SI04の記録保存はやむ負えないと判断し、12月には経済部へ回答した。翌年、SI04は消滅した。

第2節 検出した構造と遺物

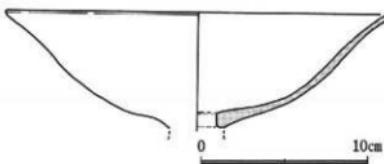
SI01（第1トレンチ検出住居跡）

遺構〔第5図、図版1(2)〕：標高45m、比高差20mの舌状丘陵の頂部に幅10m、長さ25mの広い平坦面がある。この平坦面の南端が径7m、深さ1mのレンズ状の窪みとなっていたため、第1トレンチを設定した。第1トレンチは幅0.6m、長さ8mのトレンチで、中央を市松状にずらして設定した。このトレンチから住居跡（SI01）の東西両壁が検出された。

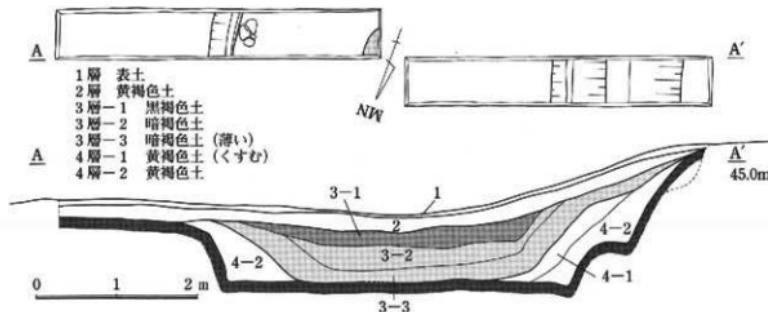
住居跡の規模は床面で径4.2m、上場で6.5m以上を測る。床面の標高は43.5mであり、残りの良い西壁は1.6mの高さをもち、床面から0.5mの高さで幅0.4mの段をもつ。東壁際には幅0.1mの壁体溝がめぐる。トレンチの中央では中央ピットのプランも確認された。

黄褐色の地山を掘り込んで造営されており、遺構覆土は黄褐色土（2層・4層）の中にレンズ状に黒みを帯びた土（3層）が入っているが、これらの変化は漸移的なものである。4層-1には粒状の炭化物が混入している。

遺物〔第4図〕：1は東壁際の床面（4層-2）から出土した素焼きの高杯環部である。環部の内30%程度が残存し、口径は23.4cm・环部高7.0cm程度の大きさと推定される。底部から胴部にかけて緩やかに内湾し、口縁にかけて緩やかに外反する器形である。器壁はかなり荒れており、調整は不



第4図 SI01出土遺物（1:3）



第5図 SI01検出状況（1:60）

明である。底部が円形に面をもって孔が開いており、坏部と脚柱部は円盤充填法により接合されていたことが窺える。色調は外面ともにくすんだ赤黄色（9YR7.5/7）を呈し、口縁部内面は赤みがかった墨色（5YR2/1）に焼けている。

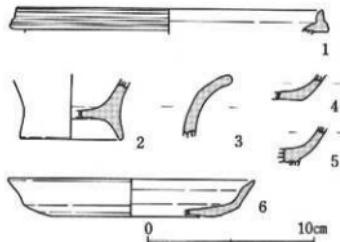
時期：床面から出土した高坏片から弥生時代後期末（V様式）～古墳時代前期（小谷式）と推定される。

SI02（第2トレンチ検出住居跡）

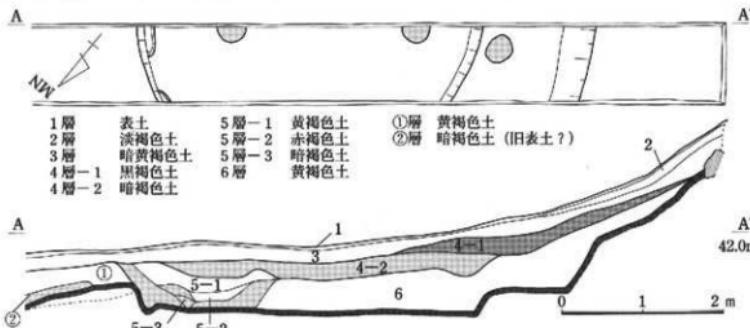
遺構〔第7図・図版1(3)〕：丘陵東側斜面、標高42mに幅8mの広い平坦面が確認されたため、トレンチを設定した。第2トレンチは長さ11m、幅1mのトレンチで、住居跡を検出した。径40cmの柱穴を3穴検出した。床面の2穴は主柱穴で柱間は2.3mを測る。切り合っているように見えるがSI04同様に壁際に段がつくものと考えた。床面の標高は41mである。平面プランは円形のプランで段をもつ形態と推定される。段は床面の高さ0.3m、幅1mのものである。床面の径は4m、上場で径6mを測る。幅0.1mの壁体溝がめぐる。

赤褐色の地山を掘り込んで造成されている。②は旧表土で、①は盛土をして谷側の壁を造っている。2・3・6層は黄褐色系の上であり、間に4～5層の暗褐色系の土が入っている。5層はブロック混じりでかなり複雑になっている。

遺物〔第6図〕：1は弥生土器壺形土器の口縁部片である。10%未満の小片で口径は19cm程度になると推定される。口縁部外面には、3条の凹線文が施される。色調はくすんだ赤黄色（10YR7.5/5）を呈する。IV様式の資料と推定される。2は台付鉢の底部と推定される。台部の40%程度の破片である。外面は薄い黄赤色（5YR8/5）、内面は消炭色（N2.5）を呈す。3は土師器甕の口縁部の小片である。10%未満の小片のため、口径の推定はできない。口縁は外反し、端部はやや肥厚する。色調は外面ともくすんだ黄赤色（6YR7/6）を呈す。4・5は須恵器壺の底部片である。10%未満の小片のため、口径の



第6図 SI02出土遺物（1:3）



第7図 SI02検出状況（1:60）

推定はできない。軟質の須恵器である。4の色調は内面が黄白色(5Y9/1)、外側が薄い黄色(3.5Y8.5/4.5)を呈す。底部は平底である。糸切の痕跡から8世紀中葉以降と推測される。5の色調は黄白色(2.5Y9/5)を呈す。底部には低い高台がつく。8世紀中頃~9世紀後半と推測される。6は硬質の須恵器である。10%未満の小片であるが、口径は15cm程度と推定される。体部外側中央で稜がつく。色調は濃灰色(N-4)を呈す。9世紀末~10世紀前半頃と推測される。

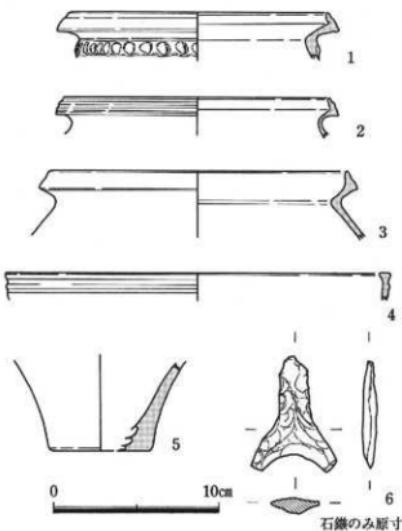
時期：住居跡の平面形態、出土遺物から弥生時代中期後葉(IV様式)頃と推定される。

SI03(第3トレンチ検出住居跡)

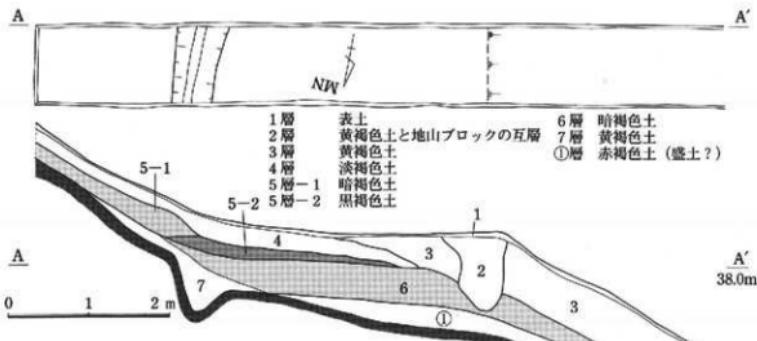
遺構【第9図】：西側斜面、標高38.5mで南北にのびる平坦面が続いているため、トレンチを設定した。第3トレンチは幅1m、長さ11mのトレンチで、壁体溝と床面を検出した。床面の標高は37.6mであり、壁体溝は幅50cm、深さ25cmを測る。床面は4mまで残存しているが、谷側は流出している。

本書では竪穴住居としてあつかったが、それ以外の建物の可能性も否定できない。

2層は地山ブロックが水平に叩きしめられている。金堀地区の試掘でも同様のものを確認している。これらの地点の共通点は大正時代の地図に道が通っている点であり、谷側の崩落を防ぐために手を加えたものと考えられる。住居跡は黄褐色の堅い地山を掘削して造営されている。3・4・7層の黄褐色系の土の間に5・6層の暗褐色系の土の上に堆積している。5層上面からは須



第8図 SI03出土遺物(1:3)



第9図 SI03検出状況(1:60)

恵器が、7層中から弥生土器が出土した。

遺物〔第8図〕：1は弥生式土器菱形土器の口縁部の小片である。口縁部外面は器壁が荒れ凹線の有無が不明である。頭部には指頭圧痕文帯が施されている。10%程度の小片であるが、口径17cm程度と推定される。色調は内外面ともうすい赤黄色（10YR9/3）を呈す。IV様式に属すると考えられる。2は菱形土器の口縁部片である。非常に薄いつくりである。口縁部外面には3条の凹線文が施されている。10%未満の小片であるが、口縁部最大径17cm程度と推定される。色調は内面が薄い黄赤色（5YR8/5）外面は薄墨色（N-6.1）を呈す。IV様式に属すると考えられる。3は菱形土器の口縁部片である。10%未満の小片であるが、口縁部最大径は19cm程度と推定される。口縁部外面は器壁が荒れているため、凹線文の有無は確認できない。色調は薄い黄色（3.5Y8.5/4.5）を呈す。IV～V様式に属すると考えられる。4は口縁部の細片である。口縁部は内湾し、端部は平坦面をもち、外面には2条の凹線が認められる。高环の口縁部と推定される。10%未満の小片であるが、23cm程度と推定される。色調は内外面とも薄い黄色（3.5Y8.5/4.5）を呈す。IV様式に属すると考えられる。5は壺又は壺の底部片である。平底の底部で外反しながら立ち上がる。20%程度の底部径は6.3cmと推定される。色調は内面がくすんだ黄赤色（6.5YR7/6）外面は灰黄色（9YR5.5/2.3）を呈す。6は完形の回基式無茎壺である。安山岩製であり、色調は消炭色（N-2.5）。長さ2.3cm、幅1.7cmを測る。

時期：壁体溝から出土している土器から弥生時代中期後葉（IV様式）と推定される。

SD01（第4トレンチ検出溝状構造）

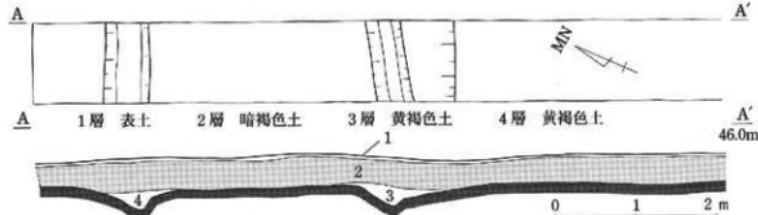
遺構〔第10図、図版1(4)〕：丘陵頂部、標高45.5mの先端には幅12m、長さ30mの平坦面が広がる。この平坦面の性格を確認するため第4トレンチを設定した。幅1m×長さ10.5mのトレンチ内からは、標高45.2mの平坦な地山と2条の溝が検出された。北側溝の規模は上場幅0.6m、下場幅0.3m、深さ0.2mを測る。南側溝の規模は上場幅0.5m、下場幅0.2m、深さ0.2mを測る。双方の溝軸を連ねて直線的に延びる。

溝は黄褐色の堅い地山を掘削してつくられており、覆土は黄褐色のしまりが弱い土である。平坦面全体には暗褐色の土が0.4mほど堆積している。墓域の区画溝である可能性がある。

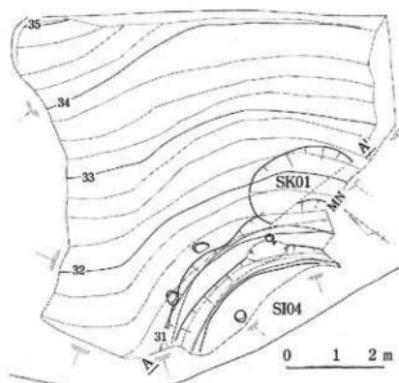
遺物・時期：遺物が出土していないため時期も不明である。

第I調査区（I区）〔第11図〕

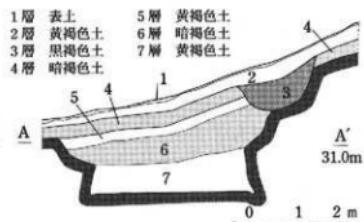
笠松遺跡の調査の中で面的な調査を実施したのは尾根間に位置するI区のみである。I区は東西7m、南北8mの調査区である。尾根は採土のため、所々急勾配で削られている。I区も同様に



第10図 SD01検出状況 (1:60)



第11図 SI04・SK01検出状況 (1:100)



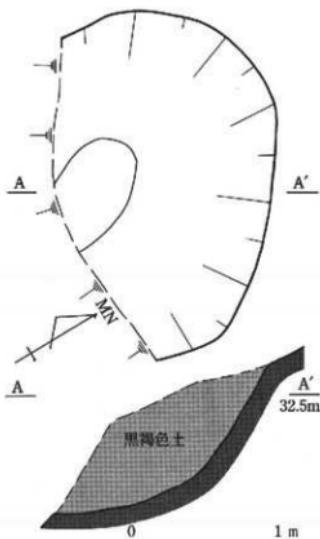
第12図 SK01・SI04検出状況 (1:100)

削られていたため、遺構が土層断面にSK01とSI04が露出していた。第12図は露出している状態を見通して図化したものである。SI01が完全に埋まりきった段階でSK01が掘り込まれていることが分かる。

SK01 (I区1号土壤)

遺構〔第13図〕：丘陵裾部を造成した際の法面上に土層が露出していることから、SI04とともに発見された。土坑の大半が削られており、残存状況が非常に悪い。規模は幅1.8m×長さ1.6m以上の平面橢円形を呈す。深さは1mであり、床面も丸みを帯びている。

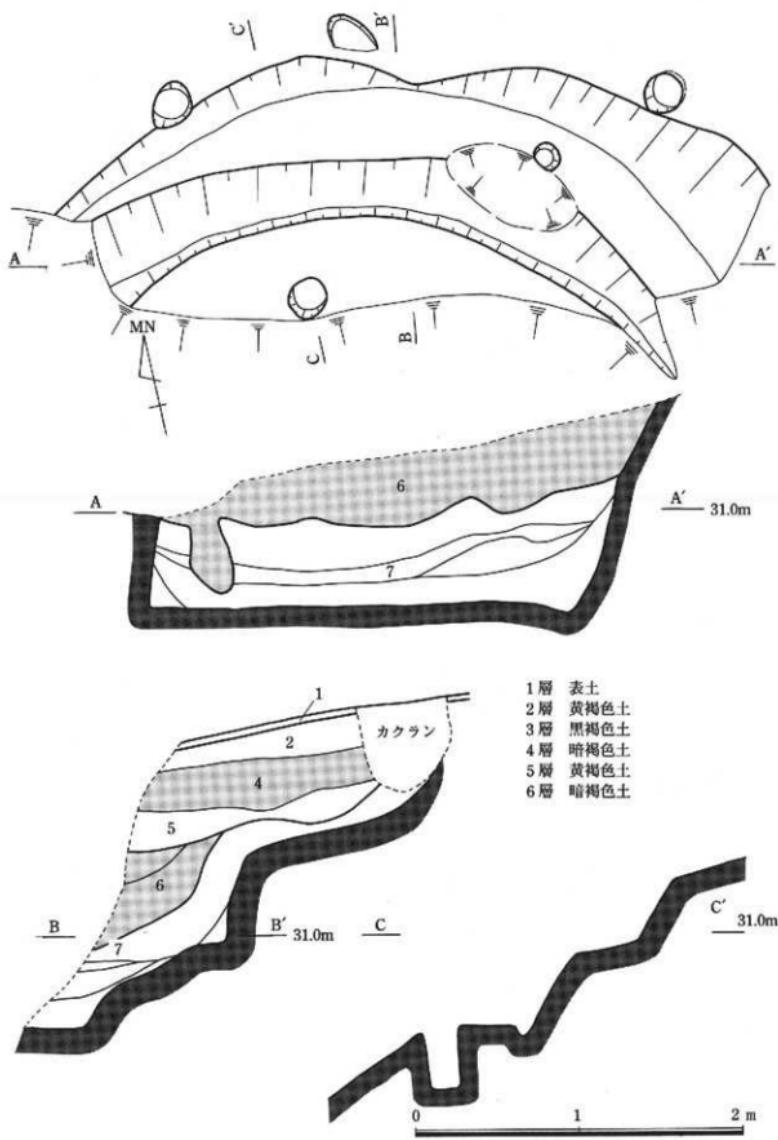
赤褐色の地山とSI04の覆土を掘り込んで造っている(第12図)。覆土は黒褐色を呈し、下ほど漸移的に黒みが増す。炭化物や土師質の土器片を含む。発見時の土層から古墳時代以降の遺構であり、墓壇と推測される。



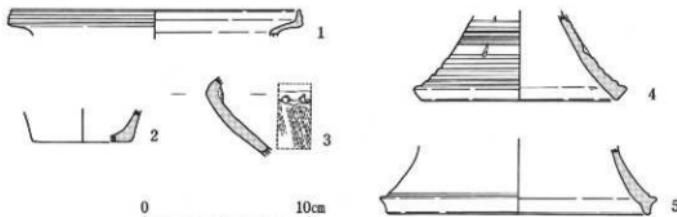
第13図 SK01実測図 (1:60)

SI04 (I区1号住居跡)

遺構〔第14図、図版1(5)〕：住居跡の一部がわずかに残存していた。平面形は円形で、壁縁に段がつく形態のものである。床面の高さは30.4mであり、幅0.1m、深さ0.05mの壁体溝がめぐる。床面から0.4mの高さに幅0.35m程度の段がつく。規模は床面で径4.4m、上場で径6m以上の住居跡と推定される。壁は最も残りの良いところで1.7mを測る。床面には主柱穴の1つと考えられる径0.25m、深さ0.4mのピットが掘り込まれている。壁際にも數カ所ピットがみとめられるが、博木を設置する穴と考えられる。黄褐色の堅い地山を掘り込んで造成されている。覆土は暗褐色系の土が堆積後、明褐色系の土が堆積している。4の弥生土器は6層と7層の間で出土している。



第14図 SI04実測図 (1:60)

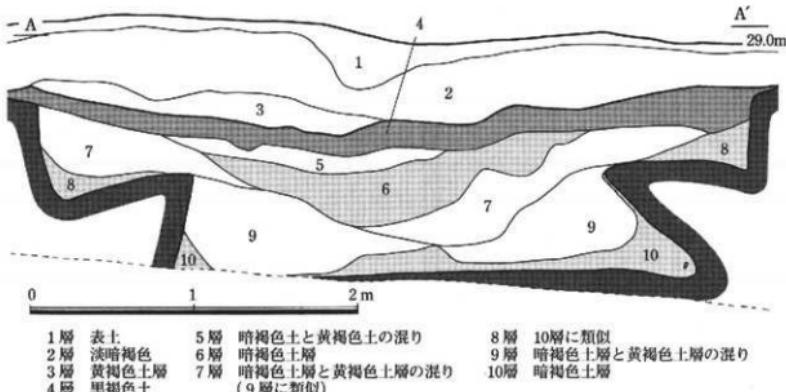


第15図 SI04出土遺物 (1:3)

遺物 [第15図]：1は菱形土器の口縁部の小片である。10%未満の小片であるが、口縁部最大径18cm程度と推定される。口縁部外面には2条の凹線文が施されている。色調は内外面ともくすんだ黄赤色(6YR7/6)を呈す。IV様式に属すると考えられる。2は底部片である。平底であり、10%未満の小片であるが底部径は6cm程度と推定される。色調は内面がうすい赤黄色(10YR9/3)、外面が消炭色(N-2.5)を呈す。弥生時代中期～後期の資料と考えられる。3は菱形土器の頸部～肩部の細片である。10%未満の小片で径は復元できない。頸部には貼付突帯がめぐる。突帯には工具の刺突により、施文されている。色調は内外面とも明灰黄色(10YR8/3)を呈す。肩部外面は縦方向の刷毛により調整されている。弥生時代後期前葉。4は高環の脚部片である。図示中25%小片で、裾部最大径は13cmと推定される。

幅2mm 5条の凹線文と幅1mm 6条の凹線文がめぐり、凹線文の間には刺突による三角形の透孔が2段以上施文されている。色調は内外面ともにごくうすい黄色(10YR9/3)を呈す。弥生時代後期(IV様式)。5は高環の脚部である。図示中10%未満の小片であるが、裾部最大径は17cm程度と推定される。色調は内外面ともにうすい黄赤色(5YR8/5)を呈する。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の削りで調整されている。

時期：出土土器から弥生時代中期後葉(IV様式)～後期前葉頃のものと推定される。

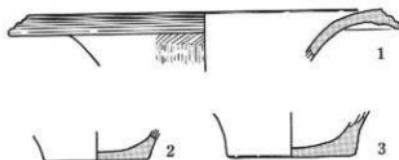


第16図 SI05土層断面図 (1:60)

第Ⅱ調査区SI05（Ⅱ区1号住居跡）

遺構〔第16図〕：仮設道路取り付け工事立ち会い中に検出された。これ以上の掘削はしないため、法面として残すこととした。傾斜している法面をそのまま見通して作図した。SI04と同様に壁縁に段がつく形態のものである。傾斜がある法面の断面において壁が内傾して見えることから、円形の竪穴住居跡の端にあたるものと推測される。床面の高さは標高25.5mで、壁の高さは約1mまで確認できる。床面から6.5mの高さで幅0.8mの段がつく。床面には壁体溝が廻る。規模は床面で径3m以上、上場で4.5m以上である。4層以下が遺構覆土であり、暗褐色系の土が堆積する。5層以下は炭化物が混入する。

遺物：立ち会い中に壺形土器口縁部片と底部片を検出した。SI05に伴うとみられ、IV様式のものである。



第Ⅱ調査区出土遺物

第3節 小 結

笠松遺跡の調査により住居跡5棟と溝状遺構1基と土壙1基を検出した。これらはSI02・SI03・SI04・SI05（斜面）→SI01（屋根上）→SK01の順で営まれていたものと考えられる。

本遺跡において弥生時代中期～後期の住居跡がまとまって検出されたことは意義深い。現在のところ、市内において弥生時代中期後葉～後期初頭の集落跡は非常に少なく、大塚町八脇谷遺跡A区1号住居、黒井田町高広遺跡I区SI01、宮内町宮内遺跡I区SI01・II区SI01、佐久保町大原遺跡SI05などが上げられ⁽¹⁾、現在のところ飯梨川東岸に限られる。これらの住居跡は円形に近いプランと隅丸方形プランがある。笠松遺跡で検出した住居跡は円形のものに近いと考えられる。また、残りの良い住居跡は壁に段が認められる。本遺跡のほとんどの住居には壁に段がつく。壁際に棚状の段がつくということは、土間と他の床が区分されていることを示す良好な資料であるといえる⁽²⁾。

今回、試掘調査した地点はすべて遺構を検出された。トレンチを設定しなかった地点にも平坦面が各所に認められ、丘陵の斜面に離壇状に高密度で住居跡が配置されている可能性がある。また、向かいの尾根にも住居跡が2棟露出している（金堀遺跡）ことから、この辺り一帯にまとまった集落が形成されていると考えられる。伯太川からかなり離れ、特に広い平地もないこの地にまとまつた集落が営まれることは、近距離に存在する弥生時代後期の山陰における代表的首長墓の四隅突出型墳丘墓であるカウカツ遺跡E-1・1号墓との関係を含めて今後検討を要す問題であろう。

註

(1) 水口晶郎氏のご教示による。

(2) 田中義昭教授のご教示による。

参考文献

正岡睦夫・松木岩雄編『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社、1992。

杉浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号、1980。

伯太町教育委員会『伯太町安田地内試掘調査報告書』1992。

第3章 清瀬塩田遺跡

第1節 調査に至る経緯と調査の経過

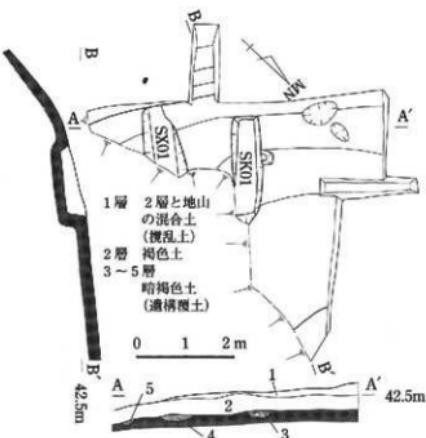
平成10年1月27日、安来市清井町字塩田地内で農地造成を行っている現場をみたところ、重機によって削られて露出した地山に溝状に黒褐色の土が堆積していることを確認した。早速、現地を踏査したところ土層断面から須恵器が露出していた。露出している土器をとりあげたが、遺物はさらに続いていることが窺えた。工事主体である土地占有者に遺構部分の工事中止を指示した。現地はほとんど造成されており、幅2m程度の土手状に遺構が残されていた。発見後、定期的に遺構の状況を監視するためたびたび巡回した。平成10年12月、遺構が風雨により崩壊する危険性があると判断し、残りの遺物も取り上げることとした。

遺跡の地形は清瀬山古墳群が立地する標高100mの丘陵から派生する尾根間にあたり、遺構が位置する部分は緩斜面だが、調査区北側から傾斜が急になる(図版1(6))。すでに検出されていたSX01を中心周囲を清掃したところ、平行してSK02を検出した(第17図、図版1(8))。その後、地形を把握するため南西側にトレンチを入れた。また、遺構が埴丘を伴うことを仮定して北西側にトレンチを入れたが、区画溝は検出されなかった。

第2節 検出した遺構と遺物

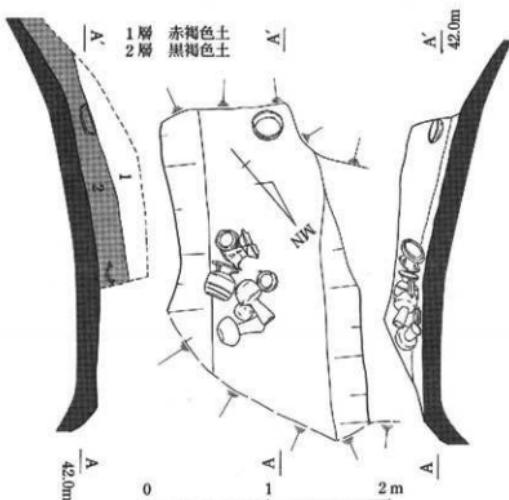
SX01

遺構〔第18図〕：残存長120cm、掘り形幅80cm、下場幅50cm、深さ20cmの溝状の遺構である。主軸はN36°Eである。遺構覆土は第2層黒褐色土で、この中から遺物が検出されている。遺物は2が南西側で出土している以外、北東側から密集して検出されている(図版1(7))。溝の両端が削り取られ用途は不明であるが、遺物の構成や出土状況、上層の堆積状況から葬送に伴う遺構と推定される。横穴墓の墓道又は木棺直葬の墓坑、周溝などの区画溝の3つが可能性が考えられる。しかし、周囲で対応するような区画溝は検出されなかった。



第17図 清瀬塩田遺跡測量図 (1:100)

遺物〔第19図、図版2(1)〕：1・2は完形の須恵器壺蓋である。天井部は中央から肩へ粗い回転ヘラ削りを施している〔Ⅱa類〕。口縁部は内面に1条の溝がめぐる〔β類〕。大谷編年の蓋壺A4型に属する。色調は内外面とも灰黄色（2.5Y6.5/0.5）を呈する。1は口径12.7cm、器高4.1cmを測る。2は口径12.6cm、器高3.6cmを測る。天井部中央は窪んでしまったため、削りが及んでいないが中央まで削る意図はあったと推定できる。3～9は須恵器有蓋高壺である。壺部の口縁部は内傾し、端部は単純に丸く仕上げる。脚は低く、2段3方向に透孔を入れる。上段は三角形、下段は台形を呈す。上段と下段の透孔の下に沈線がめぐる。脚据が大きく広がり、脚端部の面は内傾する。色調は全体的に灰黄色（2.5Y6.5/0.5）、壺底部や脚部内面は暗灰色（N-5.5～7）を呈する。これはこの器種が焼成時に裏返しにして窯詰めされていることに起因していると思われる。大谷編年の有蓋高壺C型に属する。3は10は完形の須恵器蓋である。つまみは長細く延びる。天井部には櫛齒状工具による刺突文がめぐるが、灰が被り、不明瞭である。色調は灰黄色（2.5Y6.5/2.5）。11は適當な名称がないので須恵器脚付塊と仮称しておく〔図版2(2)〕。全体に文様は施されていない。口縁部は外反しながら内傾する。胴部には3条の突帯がめぐる。台には三角形3方向透孔が施される。据部は内傾する面を持つ。底部は回転ヘラ削りが施されている。色調は薄鈍色（N-7）を呈す。口径8.5cm、胴部最大径12.0cm、裾部径9.6cm、器高13.5cmを測る。12・13は須恵器長頸壺蓋である。12は出土状況から14とセットになると考えられる。最大径8.2cm、器高2.4cmを測る。色調は内外面とも黄灰色（2.5Y6/1）を呈す。天井部には全体的に灰が被っている。13は出土状況から15とセットになると考えられる。最大径7.8cm、器高1.8cmを測る。色調は外面が黄灰色（2.5Y6/1）、内面は灰黄色（2.5Y6.5/0.5）を呈す。一条の沈線がめぐっている。12に比べ平たく、厚みがある。14・15は完形の須恵器長頸壺である。口縁部はやや内湾する。肩部はやや張り、沈線に挟まれて櫛齒状の工具による刺突文が施されている。底部から胴部下間にかけて回転ヘラ削りが施されている。色調は灰黄色（2.5Y6.5/0.5）を呈す。大谷編年では長頸瓶1型に近いが、口縁部が内湾する点と肩が張る点、長頸化など新しい属性も窺える。14は口径7.3cm、頸部径4.6cm、胴部径12.0cm、器高17.5cmを測る。底部は回転ヘラ切りで切り離したままであり、胴部と底部の境界は明瞭な稜をもつ。15は口径7.4cm、器高19.5cmを測る〔図版2(3)〕。頸部に2条の沈線が2箇所に施される。



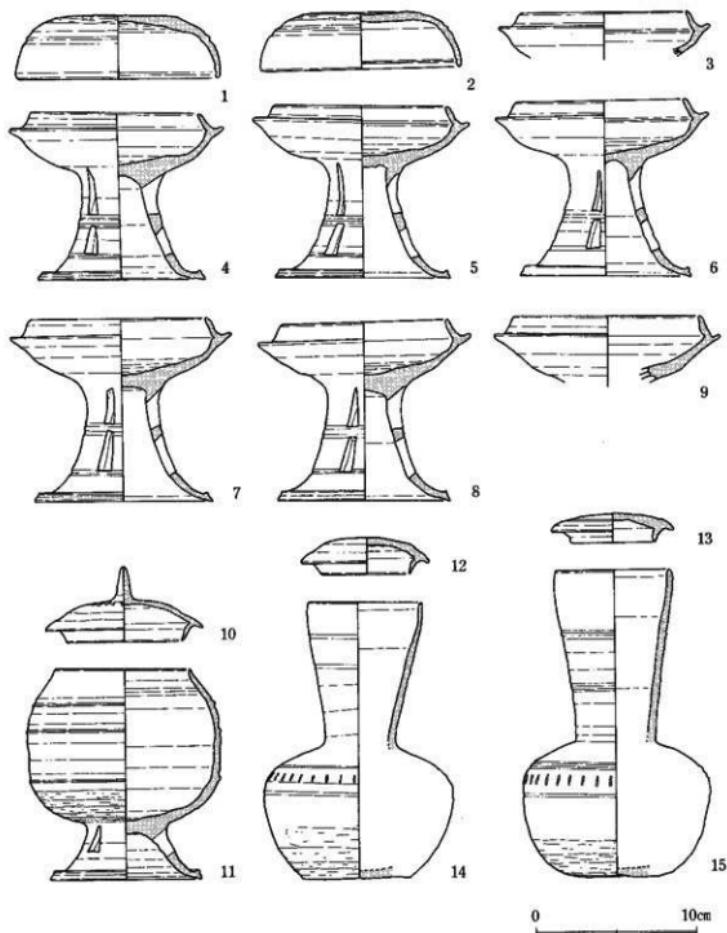
第18図 SX01実測図 (1:40)

胴部下半に施された削りは底部中央から入念に施されている。

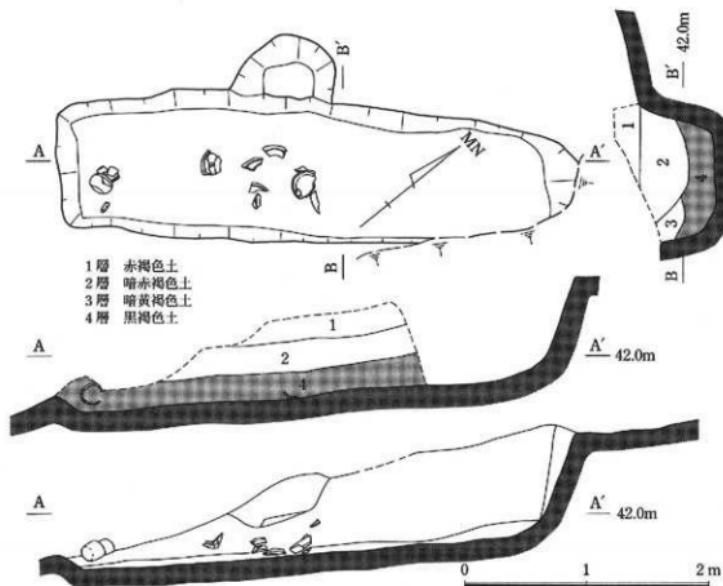
時期：大谷編年の中で、有蓋高壺C型は出雲3期、蓋壺A4型は出雲4期、長頸瓶1型は4～6期に位置づけられていることから、出雲4期（TK209形式併行）頃と推定される。

SK01

遺構〔第20図〕：SX01に平行して北西側に平面長方形の土坑を検出した。木棺直葬の墓壙と推定さ



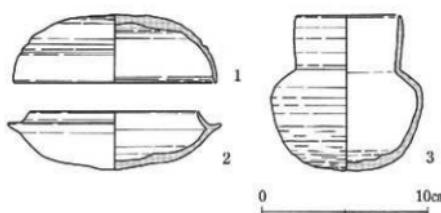
第19図 SX01出土遺物（1:3）



第20図 SK01実測図 (1:40)

れる。規模は上場で210cm×60cm、墓壙底で190cm×45cmを測る。主軸はN42°Eである。深さは最も残りの良い北東で40cmを測る。東側隅は工事により削られている。床面は北東側が10cm高い。土層は暗褐色の地山を掘り込んで造られており、1・2層は流入土である。遺物は4層中から蓋環と短頸壺が出土している。墓壙に切り合って径40cmのピットを検出したが、調査時の所見から、墓壙が埋まった後から掘り込まれている。

遺物〔第21図、図版2(4)〕：1は須恵器蓋である。墓壙のほぼ中央で床面よりやや高い位置、第4層炭化物を含む黒褐色土中から割れた状態で出土した。2とセットになる。口径12.3cm、器高4.2cmを測る。肩部を一部欠損する。天井部は粗い回転ヘラ削りが中央から肩へ施されている(Ⅱa類)。



第21図 SK01出土遺物 (1:3)

口縁端部は若干薄くなる(Ⅱa～5類)。大谷編年のは蓋環A3a型に属する。色調は内面が黄灰色(2.5Y6/1)、外表面が消炭色(N-2.5)を呈する。焼き歪みや、断面が灰赤色(7.5RP6/2.5)になっていることから、かなり高温で焼成されたと推定される。また、灰の被り方から伏せて焼かれて

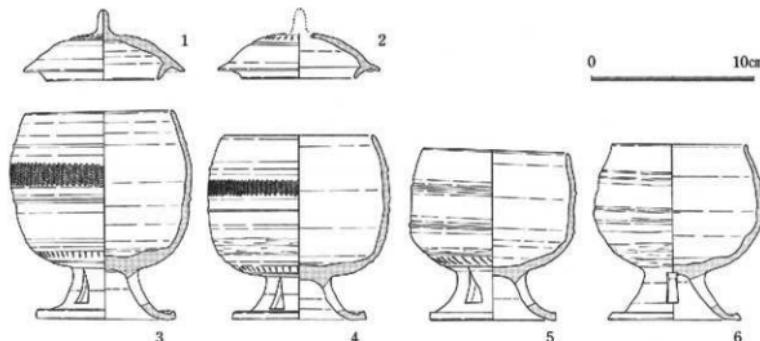
いることがうかがえる。2は須恵器坏である。1とセットになる。最大径13.5cm、器高3.5cmを測る。口縁部は単純口縁である。色調は内面が黄灰色（2.5Y6/1）、外面が消炭色（N-2.5）を呈する。焼き歪みや、断面が灰赤色（7.5RP6/2.5）になっていることから、かなり高温で焼成されたと推定される。また、灰が多量に被っていることから調整は不明であるが、焚き口付近で伏せて焼かれていることがうかがえる。3は須恵器短頸壺である。墓壙の南西端の床面からやや高い位置、蓋坏と同様に第4層中から出土した。完形で残存しており、口径9.5cm、胴部径9.6cm、器高9.5cmを測る。底部を一部欠損する。全体的に回転横ナデで成形されているが、底部中央から胴部下半へ回転ヘラ削りで調整されている。色調は内外面ともに黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。

時期：蓋坏A3a型は出雲3～4期に位置づけられている。蓋の口縁の形態から、SX01に若干先行して築造されたと考えられる。

遺構に伴わない遺物（第22図）：1は須恵器坏の小片である。10%未満の小片であるが、口径13cm程度と推定される。体部は内湾し口縁部はくびれる。柳浦分類のIIの類に属し、同様な形態は7世紀末～9世紀後半までみられる。色調は内外面ともに口縁部が灰黄色（9YR5.5/2.5）、胴部がくすんだ黄赤色（5YR5/6）を呈す。精製された胎土で、よく焼き締まっている。その他、表土層から土師質高坏の脚柱部片（透孔あり）、円筒埴輪片（タガの接合部分）、須恵器大甕片（内面青海波文）、不明金屬器が出土しているが小片のため図化できなかった。

第3節 小 結

清瀬塩田遺跡から溝状遺構1基と土壙1基を検出した。これらの遺構は出土土器からほぼ同時期に造られたものである。あえて前後関係をつけるとすればSK01出土の坏蓋の口縁の方が古い様相を残しているといえる。



第23図 出土遺物実測図（1:3）

SX01は遺構の残存状況が極めて悪く、本来の機能が不明である。そこで、一つの推測手段として、出土遺物の（仮称）脚付壺の類例を紹介する。この型式の土器はきわめて少なく、現在のところ4例しか確認できなかった⁽¹⁾（第23図）。1～4は島根県東出雲町島田池遺跡6区7号横穴墓出土のものである。1・2は蓋である。1は関係で径10cmを測る。2は40%程度の残存状況で、つまみがついていたものと推測される。本遺跡出土のもの（第19図-10）と大きさ、器形、文様構成について類似している。相違点は1・2が櫛歯状工具による刺突文の上下に沈線を施している点、施文の方向が1は左巻き、2は中心向き、第19図-10が右巻きである点である。3・4は三角形三方透孔脚付壺である。器高が15cm、11.5cmと本遺跡出土上（第19図-11）に比べ一回り小さい。胴部中央に櫛歯状工具による波状文、底部に刺突文が施されている。口縁部が内傾が少なく外反しない。5は鳥取県米子市陰田遺跡38号横穴墓（小横穴）出土のものである。三角形三方透孔脚付壺である。器高は10.5cmと小さい。内傾は弱く、外反しない。底部に櫛歯状工具による刺突文が施されている。脚部の裾も端部で肥厚しない。6は島根県安来市穴神2号横穴墓出土のものである。四角形二方透孔脚付壺である。器高が11cmと小さい。内傾が強く、外反する点、無文である点で第19図-11に類似する。しかし、胴部は球形に近く、脚部の透孔の数が少ない。これらの土器を比較すると、①口縁部の外反、②文様の有無、③透孔の数、④裾部の形態など違いがあるものの、内傾する口縁部、突帯がめぐる球形の胴部、透孔のある脚部において共通する。これらの土器は時期差があり、無文化・透孔数の減少・口縁部の内傾外反化・胴部の球形化など形式変化の存在を示唆しているため、類例が今後増えてくるものと思われる。今後、共伴遺物や部分的に類似する他形式との比較が必要となろう。現在知り得るところ、脚付壺は古墳及び横穴墓関係の遺構からしか出土していないことから、葬送に伴う儀器と推測される。

このようなことから、SX01は葬送に関連する遺構、特に横穴墓の墓道であった可能性が強いと考えられる。SK01との関係が問題になるが、松江市法吉町ヒノサン山横穴墓群では山本編年Ⅲ期の横穴墓前庭部に埴丘を持たない同時期の墓坑が築かれていたことが報告されている⁽²⁾。このような関係で捉えるのが現段階では妥当であろう。

註

(1) 鳥取県鹿野町西中園8号墳・東伯町大高野3号墳・鳥取市熊田古墳・島根県東出雲町洪山池1号横穴墓にも類例があるとのご教示を島根県埋蔵文化財調査センター松尾充晶氏からいただいた。

(2) ヒノサン山横穴墓群は山本清氏により調査が行われ、山本清「小規模古墳について」「山陰古墳文化の研究」1971の補注に記されている。この時調査に立ち会った三宅博士氏（安来市教育委員会）のご教示による。

参考・引用文献

- 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地城色」『島根考古学会第11集』1994。
- 島根県教育委員会『鳥田池遺跡・鶴賀遺跡』1997。
- 島根県教育委員会『平ラⅡ遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群』1995。
- 米子市教育委員会『陰田』1984。

ま　と　め

これまで、安来市清瀬町所在の笠松遺跡・清瀬塩田遺跡の概要を述べてきた。以下、若干の所感を記して報告のまとめにかえたい。

今回、笠松遺跡から住居跡5棟・溝状遺構1基・上墻1基、清瀬塩田遺跡から土墻1基・不明溝状遺構1基を検出した。非常に小範囲の発掘調査であったにもかかわらず、市内で検出例の少ない弥生時代中期を中心とした集落跡や古墳時代の葬送に伴う七器の良好なセットを検出できた意義は大きい。

清瀬塩田遺跡SX01で検出した有蓋高環7点とSK01の蓋環は、全て焼成時の灰の被り方から裏返した状況で焼かれたことが窺える。このように器種によって灰の被り方が異なることは、ある程度計画的に窺詰めされていると考えられる。一般的に高環は焼成時裏返す例は少なく、今後、窺詰めの計画性から生産地や時期を推定する一つの情報となるかもしれない。

清瀬地区周辺は県内で最も前方後円墳が密集する地域である。(第24図)その中でも清瀬2号墳は墳長57mを測り、市内最大規模の二段築成の前方後円墳である(第25図)。遺物が検出していないことから、前期～中期という漠然とした時期でしか捉えることができない。しかし、前期と中期では当時出雲地域の中心的存在である荒島墳墓群(荒島古墳群・仲仙寺墳墓群)の首長墓との対比において、その存在の意味合いが大きく異なる。出雲地域における古墳文化の歴史像につながる重要な課題といえよう。

今回明らかになった集落や墳墓を営んだ人々は清瀬2号墳の被葬者の勢力基盤となった民衆と同じ系譜であることは想像に難くない。弥生時代中期のまとまった集落がこの地に営まれる理由や清瀬古墳群の築造時期など究明されなければならない課題は多いことを記して、安来市清瀬町所在、

笠松遺跡・清瀬塩田遺跡の事実報告とした
い。



第24図 出雲の前方後円（方）墳分布

(近藤義郎編「前方後円墳集成 中國・四国編」山川出版社、1990から加筆転載)

参考・引用文献

- 近藤義郎編「前方後円墳集成 中國・四国編」山川出版社、1990。
- 安来市教育委員会『安来市内遺跡分布調査報告書』1991。



第25図 清瀬1号墳・2号墳測量図

(安来市教育委員会「安来市内遺跡分布調査報告書」1991から転載)



(1) 笠松遺跡遠景（南西から）



(2) 笠松遺跡SI01



(3) 笠松遺跡SI02



(4) 笠松遺跡SD01



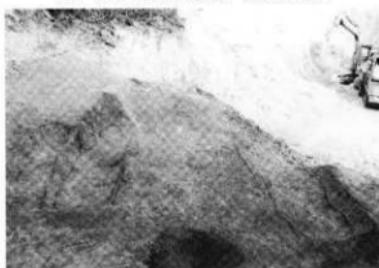
(5) 笠松遺跡SI04



(6) 清瀬塩田遺跡遠景（南東から）

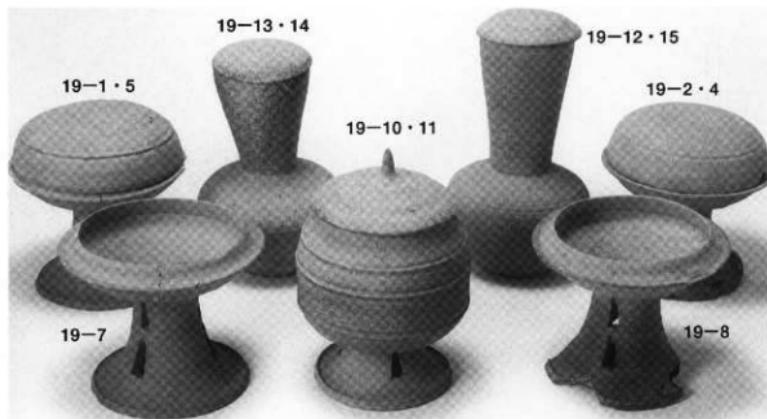


(7) 清瀬塩田遺跡SX01



(8) 清瀬塩田遺跡SK01・SX01

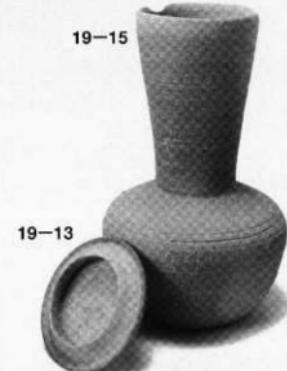
図版2



(1) 清瀬塩田遺跡SX01出土遺物



(2) 清瀬塩田遺跡SX01出土遺物



(3) 清瀬塩田遺跡SX01出土遺物



(4) 清瀬塩田遺跡SK01出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きよせちくはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	清瀬地区発掘調査報告書							
副書名	笠松遺跡・清瀬塩田遺跡							
シリーズ名	安来市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
著者名	金山尚志							
編集機関	安来市教育委員会							
所在地	〒692-0011 島根県安来市安来町874-20 TEL: 0854-22-2149							
発行月日	1999年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かしまつ 笠松遺跡	島根県安来市 清井町字笠松	32206		35度 23分	133度 17分	1995年6月 ~ 1996年10月	100m ²	道路工事
きよせしおたいせき 清瀬塩田遺跡	島根県安来市 清瀬町字塩田					1998年12月	20m ²	農地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
笠松遺跡	集落	弥生時代	住居跡	弥生土器・ 石器他				
清瀬塩田遺跡	墳墓	古墳時代	墓壙	須恵器				

A Report of the Excavations
at Kiyose Area in Izumo
— Kasamatsu Site —
— Kiyoseshiota Site —

1999 by Yasugi City Board of Education,
Shimane Prefecture, Japan

安来市埋蔵文化財調査報告書 第29集
清瀬地区発掘調査報告書

— 蓼 松 遺 踪 —
— 清 濑 塩 田 遺 踪 —

1999年3月発行
発 行 安来市教育委員会
印 刷 株式会社谷口印刷